



## 果樹

### みかん

#### ◆開花期の防除

訪花昆虫（コアオハナムグリ、ケシキスイ類）は、幼果にひつかき傷やリング状の傷をつける。また、灰色かび病は、果実にうろこ状の傷をつくる。

8部咲き～満開頃に、訪花昆虫に對して、ロディー乳剤（2000倍／収穫7日前まで／4回以内）を散布し、灰色かび病には、ストロビードライフルアブル（2000～3000倍／収穫14日前まで／3回以内）を散布する。

また、昨年ミカンナガタマムシの被害（半月状の成虫脱出孔やノコギリ状に食害された葉があれば要注意）があった園では、成虫の発生を認めたらミクロデナポン水和剤85（1700倍／収穫21日前まで／4回以内）を散布する。

\*ロディー乳剤、ストロビードライフルアブルは、かんきつで登録がある。

#### ◆腹接ぎや高接ぎによる品種（系統）更新

①接ぎ木時に穂木と台木の形成層を合わせる。  
ポイントは次のとおり。

- ②接ぎ木部への雨水の侵入、乾燥防止と穂木の固定のため、接ぎ木テープでしっかりと巻く。
- ③活着後は、接ぎ木テープを破つて発芽できない場合は、部分的にテープを破つて発芽を助ける。
- ④複数発芽すれば、一芽だけ残し、風で折れないように支柱に誘引する。



## もも

貯蔵養分による生育から、新葉の光合成による養分へと切り替わる時期であり、新根や新梢の伸長、果実の肥大が盛んとなる。そのため、新梢管理、摘果、袋掛け、病害虫防除と作業が遅れないと計画的に行う。

#### ◆摘果と袋掛け

生理落果の様子を見ながら、

摘果は2～3回に分けて行う。早生品種は、30～80cmの長果枝に品質の良い果実がなりやすいため、最終的に長果枝の中央部付近に1～2果、30～50cmの中果枝に1果を残し、5月中下旬から袋掛けを行う。

晩生品種は、10cm程度の短果枝を中心に残す。残す割合は、

短果枝5本のうち1本に1果となるようを行う。

#### ◆病害虫防除

5月上旬に、黒星病や灰星病、うどんこ病の防除に、ストロビードライフルアブル（2000倍／収穫前日まで／3回以内）を散布する。

#### ◆いちじく

また、アブラムシ類、シンク

イムシ類、モモハモグリガの防除には、ロディー乳剤（100～2000倍／収穫前日まで／5回以内）を散布する。ウメシロカイガラムシが発生している園では、コテツフルアブル（2000倍／収穫前日まで／2回以内）を散布する。

#### ◆芽かき

5月中旬には、せん孔細菌病

の防除に、バリダシン液剤5（500倍／収穫7日前まで／4回以内）を散布する。

#### ◆うめ

#### ◆病害虫防除

黒星病は、老木での発生が多い。5月上旬に、ストロビード

ライフルアブル（2000～3000倍／収穫7日前まで／3回以内）を散布する。

また、カイガラムシ類が発生している園では、5月上旬にモスピラン顆粒水溶剤（2000倍／収穫前日まで／3回以内）を散布する。

芽かきは、葉が3～4枚展開する頃に行う。一文字整枝で、せん定時に2芽残した場合は、次のポイントに注意する。

#### ◆実肥

5月中旬に、10a当たり焼安S403（14.10.13）を20kg施用する。

#### ◆いちじく

芽かきは、葉が3～4枚展開する頃に行う。一文字整枝で、せん定時に2芽残した場合は、次のポイントに注意する。

#### ◆芽かき

①上芽は勢力が強くなり過ぎるので取り除く。

②なるべく主枝に近い節の芽を残す。

③生育の早過ぎるものや遅過ぎるものを取り除き、生育をそろえる。

④果実へ十分日光が当たるよう、主枝の片面で結果枝が40cm間隔となるようにする。

#### ◆病害虫防除

アザミウマ類の防除には、5月末から6月上旬に、ディアナWDG（5000倍／収穫前日まで／2回以内）を散布する。

